

東大駒場友の会



会報第31号

二〇一八年度教養学部長との懇談会について

本会は、この春も多くの新入生の保護者の皆様を新会員としてお迎えしました。新入会員の皆様、ようこそ駒場へ、ようこそ「東大駒場友の会」へ！

さて、当会の春の行事として、恒例の「新入生保護者と教養学部長との懇談会」が、四月十四日(土)駒場キャンパスで行われました。今年は、東京大学創立からの節目の年ということで、教養学部長の講演に加え、総長を迎えての特別講演会の開催となりました。

この催しは、当会が主催するものの中でも最も重要な行事で東京圏の外からもなる



べく多くの新入会員の皆様にご参加いただけるよう、二年前から入学式直後の土曜日に実施しています。入会手続きと重なる時期の申し込み受付やもろもろの準備で慌ただしくはあったのですが、本年も、春の日のキャンパスに、次々とお集まりいただいた新入生保護者の会員は、三二〇人という盛況でした。

保護者の皆様が受付を済ませ着席されている九〇〇番教室に、本学教授でオルガニストでもあるヘルマン・ゴチエフスキ先生のオルガン演奏が響き、開会となりました。本学会長、浅島誠本学名誉教授の新しい会友の皆様への歓迎のご挨拶と、当会の活動と趣旨についてのお話のあと、五神真総長が「ようこそ東京大学へー変化の時代を楽しむ」と題した講演で、東京大学全体の構想と取り組みについて話されました。そして石田淳教養学部長・総合文化研究科長(本会顧問)による「駒場の杜の過ごし方」と題された講演があり、駒場キャンパスではリベラルアーツの伝統と先進的な研究が合わさり、多様でありながらも一体性が保たれていることを話されました。

講演会終了後、九〇〇番教室から出てくる保護者の皆様をグループに分け、案内人の教員が付き添う恒例のキャンパスツアーが始まりました。協力教員は、若手教員からヴェテランの駒場の重鎮・名誉教授まで三六人。キャンパスのシンボリックな時計塔のそびえる一号館には、通常の教室以外にも、駒場生活に大いに関わりのある学生相談所や進学情報センターもあります。こちらで説明を受けたあと、新入生向けの語学

の授業に頻繁に使われる教室を見学し、さらに一号館テラスから正門や建物の配置をながめ、周囲や中庭に茂る木々を見下ろしました。また、新入生にとってとても大事な教務課、図書館や所蔵品展「中国の金属工芸品」が開催中の駒場博物館や、さらにはそれぞれの先生方の研究室などをみていただきました。

ツアーのグループが再び一堂に集まったのは、生協食堂二階のバーティー会場です。そこで、当行事の締めくくりとして、教員・職員と保護者の皆様との昼食・懇談会が開かれました。まず東京大学音楽部管弦楽団(東大オケ)有志メンバーによる演奏がありました。その伴奏と前教養学部長・小川桂一郎名誉教授(本会理事)のリードで、東京大学応援歌「ただひとつ」を全員で歌ったあと、当イベントをそれぞれの場で準備し、駒場生の生活を日々支えている教養学部事務部の各課を代表する職員が、増田浩一事務部長から紹介されました。その後は食事をとりながら、ツアーで親しくなった会員の方々と教員との間で会話が花が咲き、今年も新入生保護者の皆様と教職員とが和やかに語り合う場となりました。

社員総会と活動報告会・懇談会について

当会は二〇一六年十二月五日開催の第一回社員総会をもって、従来の「駒場友の会」から組織の改変を行い一般社団法人「東大駒場友の会」として発進し、昨年度より年に一度の社員総会と通常会員・会友会員に

報告を行う「活動報告会」を開催しております。今年度は六月二日に開催、あわせて理事・社員・会員間の懇談の会を設けました。理事会の審議を受け、社員総会で浅島誠会長の議事進行により以下の議題が協議され、承認されましたので、ここに報告します。

二〇一七年度事業報告

Ⅰ. 懇談会・講演会・演奏会などの開催(共催・協賛などは一部の行事のみを記載)

一 新入生保護者と教養学部長との懇談会(四月十五日)

二 音楽演奏会の共催と協賛(オルガン委員会、ピアノ委員会などが主催するもの)

三 味覚のアトリエ@駒場(十月二三日)

四 秋の講演会(十一月二六日)

Ⅱ. 寄付事業

「学生のための寄付」を実施。会員有志や未入会の新入生保護者から合わせて三、六一一、四〇〇円のご協力をいただいた。主な寄付先とその活動は以下の通り。駒場図書館学生用図書(五二二、六七七円)、三鷹国際学生宿舎院生会(十万円)、HCA P(ハーバード大学の学生との交流プログラム、一四八、三二四円)、グローバルネクスストリダーズフォーラム(二二万円)、駒場祭への協賛(四〇万円)、駒場博物館(特別展広報活動への支援、四六九、二六〇円)、「金曜特別講座」への支援(八八、九〇〇円)。寄付支出の合計は、九四九、一五一円となった。

Ⅲ. 広報活動

一 会報第二十九号(二〇一七年九月十五日)、第三十号(二〇一八年三月十五日)

- 二 webサイト
- IV. 会員・会友の獲得
 - 二〇一八年三月三十一日（期末） 会員数 終身会員一三九名、通常会員四四一名、会友二、八七一名（合計三、四五一名）。一高同窓会会員一七八名、東高同窓会会員八一名
- V. 理事会・社員総会や各種委員会の開催
 - 一 理事会・総会の開催（五月二七日）
 - 二 事務局運営会議の定期開催（四月二四日、七月二四日、十一月六日、二月八日）
 - 三 一高同窓会担当専門委員会（五月十五日）
- 二〇一八年度事業計画案
 - I. 懇談会・講演会・演奏会などの開催
 - 一 新入生保護者と教養学部長との懇談会（四月十四日開催済）
 - 二 講演会等の開催
 - 三 「味覚のアトリエ@駒場」
 - 四 音楽活動の支援（教養学部オルガン委員会、ピアノ委員会が開催する演奏会）
 - 五 駒場博物館への支援
 - 六 金曜特別講座への協力
 - II. 寄付事業
 - 「学生のための寄付」として寄せられる寄付金を活用、教養学部および学生団体への寄付を継続し、駒場キャンパス、三鷹国際学生宿舎等の教育研究の環境の向上と多様化に協力する。
 - III. 広報活動
 - 一 会報第三十一号、第三十二号の発行
 - 二 webサイト
 - IV. 理事会・社員総会や各種委員会の開催
 - 一 理事会・社員総会・活動報告会・会員懇談会の開催（六月二日開催済）
 - 二 事務局運営会議の開催（年四回）



建設に伴う諸課題：耐震補強、スペース不足、ここが不便など、建物固有の顕在的問題の解決だけ

見えないイメージを可視化するー駒場キャンパス計画への眼差し

三 一高同窓会担当専門委員会（五月十七日開催済）
 予算と決算の詳細については
 webサイト (<https://tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp>) に掲載しておりますので、そちらをご覧ください。
 （文責 東大駒場友の会事務局
 総合文化研究科教授 村松真理子）

前駒場キャンパス計画室室長 加藤道夫
 銀杏並木を東へ歩くと、正面と左手に大庇が目に入る。左を見ると、隣接する八号館と大庇がフレームとなってクスの大木を切り取っている。その背後にはガラスのホール。視線は、右手の壁沿いの通路に沿ってホール、サンクガーデンを越え、学生会館へ延びる。そこには、視線を介した銀杏並木に直交する空間連鎖がある。その他、八号館や一八号館、21KOMCEEのピロティが、視線を介して分断された諸空間を縦横に連鎖させていることに気づいてほしい。

なら、建築家の役割はさほど重要ではない。しかし、既存環境に潜在するイメージを予見し、その可視化を通じてそれを顕在化するのには容易ではない。あえていえば、これこそが建築家の試金石である。

私の駒場キャンパス計画への関与は全学組織である「キャンパス計画室」室員就任（平成五年）に始まる。最初の仕事は駒場キャンパスのマスタープランである「再開発・利用計画要綱」の策定だった。学部時代の指導教官であった香山壽夫先生に指導を仰ぎつつ、何とかまとめることができた。そこでは、自然環境の保全と過去の建築遺産の継承が明文化されている。なぜなら、当時のキャンパスは施設の老朽化と圧倒的な量的不足という問題に直面しており、こうした問題のみに目が向けられ、場当たり的な再開発が進むと、自然環境や過去の遺産が損なわれる危惧があったからである。加えて、銀杏並木を主軸とし、その延伸とそれに平行する緑道、直交する副軸からなるキャンパスの全体構造を図式化した。

二一世紀に入ってから、マスタープランに託した理念と図式を実現する機会が到来した。その設計業務は、大学院時代の師である広部達也先生の退任以降、長い間休眠中だった駒場キャンパス計画室の再起動の下、新たに室員として採用された筑紫一夫さんとの二人三脚で始まった。

まず、新図書館建設に伴う旧図書館（現在アドミ棟として利用されている建物と駒場博物館として利用されている第一高等学校時代の図書館）の改修に取り組んだ。そこで試みたのが場当たり的な増改築によって失われた過去の空間イメージの再生だった。まず旧閲覧室の大空間を上下に分断していた増設床を撤去、展示空間として再生させた。さらに旧図書館との接続部分を撤去して向かい合う講堂との対称性と東奥の矢内原公園への抜けを取り戻した。続く旧同窓会館（現在の駒場ファカルティハウス）改修でも、外観の保存・修復に加えて、内装を全面的に見直し、建物に潜在する空間イメージの顕在化に努めた。

併行して取り組んだのが、旧駒場寮跡地に現在の駒場コミュニケーション・プラザを建設する計画の策定である。この事業は、建設、維持管理、運営において民間事業者を活用するPFIという手法で行われた。そのため事業者への「要求水準書」に具体的な案を埋め込む形で、駒場寮跡地の潜在的イメージの顕在化に努めた。まず、旧駒場寮建物間の雑草に埋もれていた樹木群を新計画の中庭のシンボルツリーとして残し、池に向かって緩やかに傾斜する自然地形を顕在化するように求めた。次に、旧北寮前にあった地下への入口ポーチの一部を中庭に移しミニメントとする、旧中寮の柱位置に照明を埋め込むなど、過去の記憶の顕在化も盛り込んだ。ここでの周辺環境との接続は、主軸である銀杏並木の延伸に留まらない。中庭に入ると、主軸に直交して庭を横断する道が、新図書館からピロティ越しにキャンパスプラザへと延びている。また芝生内を斜めに下る小道が、視線をその先にある池へと誘導している。

最後に携わったのが、21KOMCEEである。駒場コミュニケーション・プラザへ

の旧一〇五号館移転に伴って、その跡地に計画された。その基本設計は一時駒場を離れていた建築都市デザイン研究所の筑紫一夫さんをお願いし、実現段階で特任准教授として加わってもらった。その敷地中央には、旧一〇五号館の搬入口を塞ぎ邪魔者扱いされていたクスの大木があった。当時の小宮山宏総長の鶴の一声で保存することになり、その潜在的価値を顕在化する必要に迫られた。設計は困難を極めたが、冒頭に記したような空間連鎖を創出できた。

四半世紀にわたる私のキャンパス計画への関与を要約するなら、それは、既存環境に潜在するイメージを掘り起こし、その可視化と連鎖による体系化を通じて、諸イメージが織りなす集合体としてキャンパスを再編することだった。

(総合文化研究科教授 広域科学専攻

広域システム科学系(情報・図形))

東大と箱根駅伝

陸上運動部長 八田秀雄

正月の箱根駅伝は、正式名称を「東京箱根間往復大学駅伝競走」といい、来年正月の大会で九五回になります。この大会は関東の大学による駅伝で、実は全国大会ではありません。十一月に名古屋―伊勢間で行われる駅伝が全国大学駅伝ですが、こちらは今年で五〇回であり、箱根駅伝とは歴史にもまた注目度や視聴率にも差があります。関東の大学が一番目指すのは箱根であって伊勢ではないのです。それだけ箱根駅伝は注目度が高く、視聴率が三〇%に達するほ

どの人気番組になっっている駅伝であることは、皆さんもご承知と思います。

箱根駅伝は関東の大学による駅伝ですから、東大にももちろん参加資格があります。実は第三回大会から五回続けて、駒場にあった農学部実科が出場しています。大正時代のことはつきりしませんが、記録に残る出場選手名をみると今の東大陸上部の名簿に載っている方がいないので、公式記録上は東大の出場ではないとするのが妥当のようです。また農学部実科がその後の東京農工大学ともみなせるので、農工大の前身が出場したとしているものもあります。

そして東大はチームとして箱根駅伝に出場したことが一度あります。それが一九八四年の六〇回大会です。その頃は十五校が出場していましたが、記念大会ということで出場校が五校増えました。その予選会を七位(シード九校なので全体の十六位相当)で突破し、本番を迎えました。私はその時大学院生でコーチでしたから、いま運営管理車と呼ばれている車(当時は自衛隊のジープ)に乗って、選手の後を付いて今とほぼ同じコースを往復しました。大手町スタートを出て品川に先回りしてから一区の清水選手の後に付き、鶴見の中継所でぎりぎりたすきが渡ったり、二区の渡辺史選手が中盤ちよつときつかったのが最後の戸塚の登りで復活して前を抜いたり、五区の半田選手を恵命学園から前に出て後ろ向きに応援する中で芦ノ湖のゴールに飛び込んだこと、最後の芦ノ湖直線道路は今と変わらず五重六重の人垣だったことなど、よく覚えています。結果としてこの時は総合一七位。明

治大学や慶応大学に勝ちました。

この六〇回の頃はラジオの中継はありませんでしたが、テレビ放送は三日の昼に少しあっただけでした。その数年後にテレビの生中継が始まりました。それから人気爆発していき、大人数番組となっていきました。それに伴って競技レベルも格段に上がり、大学がこの駅伝に出て知名度を上げ、受験生を増やし経営の安定を図るような意味合いが強くなりました。大学側は高校の有力選手をどれだけ集めるかが重要になり、高校側もレベルを上げて箱根の有力校に送り込むことを望み、選手も箱根駅伝で活躍することが競技人生の最大の目標になっているのが実状です。大学卒業後にマラソンを中心に世界で活躍するような選手が出ていないともよくいわれます。高校まであまり鍛えられていない選手ばかりの東大が、チームとして箱根駅伝に出るといのが至難といふべきレベルになってしまっています。

ただし、その後レベルの向上に伴い出場校を増やしても先頭との差が小さくなり、交通規制が長くならないので、出場校が恒常的に二〇校になりました。うち一チームをチームとして出られなかった大学から選ぶという「学連選抜」という制度ができました。それで八一回大会には文科一類一年だった松本選手が八区で出場しました。この時一人を抜く好走で区間十位。これがこれまでの東大箱根駅伝区間最高順位になります。松本選手は十二月の全国高校駅伝を走ってから、二月の入試で東大合格し、箱根も走りました。そしてその後、学連選抜で走った東大選手はいませんでした。

さらに九一回大会から制度を変えて「学生連合」という名称で、それまでの一校二人から一校一人のみが走れる制度になり、東大の選手が走れる可能性が少し高くなりました。そして去年の予選会では東大の近藤選手が二〇位。学生連合対象の大学ではトップの記録で走りました。それで本人の希望で一区を走る予定でしたが、直前のインフルエンザで交代となってしまいました。しかし今年彼は主将で四年です。まさに最終学年で活躍してくれと思います。今夏の七大会では一五〇〇mと五〇〇〇mをどちらも大会新で優勝しています。今年十月十三日の予選会からは、走る距離がこれまでの二〇kmから少し伸びてハーフマラソンに変わります。最終学年で箱根に挑む近藤選手にどうぞ注目ください。

(総合文化研究科教授 広域科学専攻

生命環境科学系(スポーツ・身体運動))

文学研究と短歌

川野芽生

私は大学院で研究をする傍ら、短歌を作っています。短歌を始めたのは大学に入学した頃で、東京大学本郷短歌会というサークルに入ったのがきっかけでした。歌会に参加するうち短歌の奥深さに惹かれ、のめり込むようになりました。

短歌の面白さはやはりその短さにあります。少ない言葉からどれだけ多くの意味や情感を引き出せるかが鍵になります。同時に、イメージがぶれてしまっても後から言葉を付け足して補正するようなことができ

ません。そのため、ひとつの言葉に、語義、過去の用例、音の響き、字面など、あらゆる面から光を当てながら、言葉を選んでいきます。この言葉は多義的で歌のイメージを広げてくれるから使いたい、あるいは多義的で一首の意味がぶれてしまうから避ける。この言葉の漢字は本来の語義とは異なる情景を思い起こさせてイメージが広がる、あるいはこの漢字は情報量が多すぎるから平仮名にする。この言葉はリズムがいいから使いたい、あるいはリズムが軽快すぎて歌の内容に合わないから避ける、など……。

同時に、実は短歌は長いものでもありません。短歌を作ろうとしているのに、「五七五」や「七七」だけで完結したフレーズができしてしまう、ということが歌人にはよくあります。おそらく「五七五」や「七七」の方が形としてはスマートで、「五七五七七」はひとつのフレーズとして完結するには少し長すぎるのです。その、長すぎるゆえに溢れ出してしまう情緒のようなものを選んだのが歌人で、洗練と格好良さを選んだのが俳人なのでしょう。それでも、「歌が途中で終わってしまう」問題にはしばしば悩まされます。適当に字数を補うことはできません。一首の中に少しでも余計なものがあると、全体が台無しになってしまうからです。

短歌の面白さ、と言いつつ、難しさばかり書いてきたような気もしますが、そこにこそ面白さがあります。普段は膨大な言葉の中に埋もれているひとつひとつの言葉を取り上げて、じっくりと光を当て、様々な面から見直す、というのは、宝石を掘り出して磨き上げることに似ています。歌を

作るときも、読むときも、言葉が意外な光を放ち始める瞬間はそれだけで心がときめくのです。

言葉へのこうした細やかな注視が求められるのは、文学研究でも同じです。大学院では、十九世紀から二〇世紀にかけてのイギリスのファンタジー文学を研究しています。国文学じゃないの、と驚かれることもあるのですが、書かれた言語や形式にかかわらず、文学という営みは奥深く魅力的です。ちなみに私が主な研究対象としているJ・R・R・トールキンは本職が言語学者で、先に人工言語を作り、それに合わせてあの長大な『指輪物語』を書いたというくらい、言葉にフェティッシュな関心を寄せる人でした。古英語の文献に現れる名前や、家の近所の地名などの中に、彼がいかに深い物語を見出していたかが先行研究で解明されています。ひとつの言葉から広大な世界に至るその旅を、私もトールキンのあとをついて辿っていききたいというのが、私の研究の動機のひとつかもしれません。

言葉そのもののへの関心を強調すると、現実社会への関心とは反比例するもののようになってしまうことがしばしばあります。短歌にも「ことば派」と「もの派」という言い方があります。けれど、言葉は人間の精神の営みの結晶であり、決して現実から遊離したものではないというのが私の考えです。私の現在の研究でも、別の世界を空想するというファンタジーの試みを、二度の世界大戦を背景とした、現実社会との対峙のあり方として捉えようとしているところです。

今年二月に私は歌壇賞という新人賞を頂

きました。受賞した作品は、フェミニズムを柱とした三〇首の連作です。特に嬉しかったのは、言語表現としての完成度の高さと思想的な深みを両立している、といった趣旨の評価を頂いたことでした。それが私のやりたかったことだったからです。言葉は人間の精神の営みの結晶だ、と書きましたが、その営みの中には明らかに負の歴史もあって、そのひとつが男性中心主義です。それと向き合うことなしに書き続けることはできない、と思いました。ですから、受賞を機に多くの人に読んでいただけたのは嬉しいことでした。

これからも、創作と研究の両面から文学を探究していくつもりです。どこかまでみなさまのお目に留まったら幸いです。

(総合文化研究科博士課程三年)

秋の行事のご案内

要予約

・秋の文化イベント(レクチャーと昼食会)
「東大教員と巡る駒場博物館と昼食会」

(九月二二日(土) 十一時～十四時)

生物学が専門の本学教授道上達男先生の講演会後、先生の案内で特別展「卵からはじまる形づくり」を見学します。昼食会後はキャンパスを案内します。

・味覚のアトリエ@東大駒場(十月二二日(月) 十九時より)

クラブアトラス×味覚の一週間「東大生へ向けての食育」テーマ「味の伝承」フランスの古典料理を知り楽しむ

・秋の講演会(十一月二五日(日)時間未定)

第一部 細野正人先生(学生相談所)

第二部 浅島誠先生(東大駒場友の会会長、本学名誉教授)

詳細は、順次ウェブサイトに掲載いたします。

東大駒場友の会会報【第31号】2018(平成30)年9月15日発行
東大駒場友の会 会長 浅島 誠

〒153-8902 目黒区駒場3-8-1 東京大学 駒場ファカルティハウス内
電話：03-3467-3536 FAX：03-3465-3334

メール tomonokai@post.c.u-tokyo.ac.jp
web サイト https://tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp/

デザイン・印刷 株式会社双文社印刷
https://www.sobun-printing.co.jp



会報のバックナンバーをインターネット上でご覧いただけます。
東大駒場友の会ホームページのトップ画面に「会報バックナンバー」というボタンがありますので、そこからお入りください。

爽やかな風に包まれてゆったりと
くつろぐことのできる

フランス料理

ルヴェ ソン ヴェール 駒場

駒場友の会の皆様がお食事の際に注文なされたコーヒーは、お支払いの際に会員証・会友証をご提示下さいますと無料になります。

[営業時間] 11:00～14:30、17:00～21:00

Tel：03-5790-5931 / Fax：03-5790-1902

◎駒場ファカルティハウス内